

資産作りの常識

新

まさおか としゆき
正岡 利之 (MUF G資産形成研究所長)



1982年、三菱信託銀行(現三菱UFJ信託銀行)入社。主に年金や投資信託を中心として、資産運用業務に携わる。2015年より同社で金融教育業務に従事。18年8月より現職。

ホームアセットバイアス

投資 投資を始めるにあたって、投資対象が国内に偏りがちになることを「ホームアセットバイアス」と呼ぶ。自国通貨(円)建ての投資が多くなるのは自然なことだが、一方で「分散投資」の観点では、海外を含めてより広く分散することが望ましい。

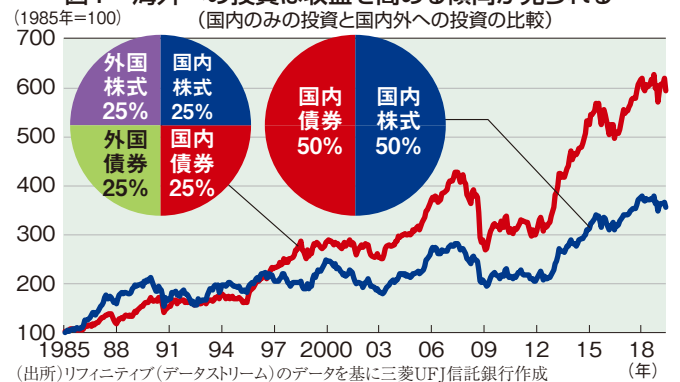
過去の運用実績を見てみよう。

図1は国内の債券と株式に投資した場合と、海外の債券と株式も含めて投資した場合の実績を比較した。日本がバブルだった1980年代後半からの数年を除けば、国内だけのパフォーマンスよりも、海外の株式と債券にも投資した方が、相対的に良いリターンとなっている。

図2のように世界全体の实体经济(名目GDP(国内総生産))は、上昇トレンドを続けている。株式の価格は短期的には实体经济から乖離することがあるものの、中長期的にはそれに沿った動きをする。つまり、経済実体が縮小し続けない限りは、株式を保有していれば、その成長を享受できることになる。

国や地域ごとに見ても同様の傾向が見られる。従って、日本のように国内の成長率が相対的に低い場合には、世界に分散することで、

図1 海外への投資は収益を高める傾向が見られる
(国内のみの投資と国内外への投資の比較)



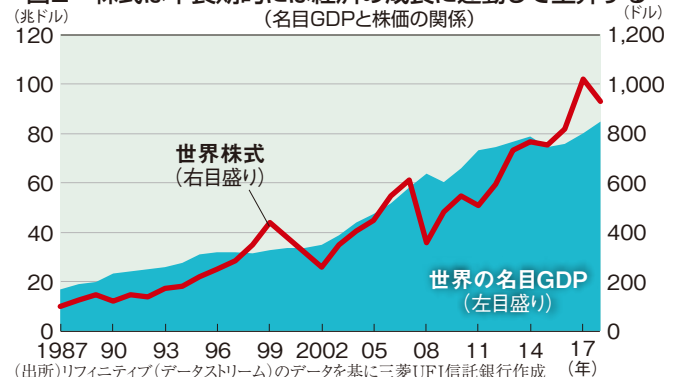
他の地域が補完をしてくれる。

世界の成長を享受

日本・米国・欧州・新興国という区分けで考えたとき、その中で中長期的に最も成長の高い地域や国を選択すると、パフォーマンスのいい地域へとその都度投資先を入れ替えていくことができれば、それに越したことはない。

しかし、事後的に結果を見れば分かりきったことでも、事前に相場を予測してうまく立ち回ることには、現実には簡単なことではない。そこで特定の地域や国に集中投資

図2 株式は中長期的には経済の成長に連動して上昇する
(名目GDPと株価の関係)



するのではなく、分散して投資することが有効な方法となる。地域・国ごとに一時的なパフォーマンスの優劣はあるにしても、それらを合計した世界全体の实体经济も成長をしているからだ。

また、国内よりも海外の方が高い競争力をもつ産業分野もある。例えば、IT・情報関連など、国内だけでは企業数や規模・競争力が必ずしも比較優位ではない場合、こうした分野こそ海外への分散投資によって、技術革新などの恩恵を享受できる。これも世界に分散投資を行うことの意義である。